



**設立 10 周年
記念号**

- 秋に語る
シビル NPO が社会を変える
- 事業報告
設立 10 周年記念セミナー開催される

□ 記念寄稿

- ・宇佐 洋二
- ・坂本 聰
- ・舌間 久芳
- ・鈴木 進
- ・高橋 肇
- ・西島 葉子
- ・和久 昭正

ロトピックス

CNCP シンポジウム報告

□ 参加者からのメッセージ

支援する中間支援組織を創設する準備組織として建設系 NPO 連絡協議会が設立され、土木学会で私が CSN の活動を講演したことがきっかけでこの組織の設立発起人として活動することとなりました。そこに建設系 NPO として活動している 30 数団体がメンバーとして加盟されました。

発足当初私たちは建設系 NPO の活動現況は良くわかりませんでした。また、NPO の活動を取り上げた多くの資料において建設系 NPO の姿は見当たりませんでした。しかし、加盟した 30 数団の活動内容を見ることによって建設系 NPO の活動自体がけして皆無であったのではなく、過去に相当の活動を展開してきているにも関わらず建設系 NPO の活動は広く社会に顕在化することなく従来の市民活動やボランティア活動と一括りにされて特質されてこなかっただけであったことが明らかとなりました。

また、建設系 NPO の活動内容を分析してみ

□ 秋に語る □

シビル NPO が社会を変える

代表理事 辻田 满

早いものでシビルサポートネットワーク (CSN) が創立 10 周年を迎えました。NPO 法が公布されて 10 年が経過する 2004 年 11 月の創立でした。

未だに NPO と言えばボランティア活動と思っている認識の中で設立当初から事業型 NPO をを目指した取り組みはまだソーシャルビジネスなる言葉も一般的ではなかった時代には稀有な存在であったと思います。

また、周りを見渡しても当時は建設系 NPO に



関わっている方は見当たりませんでした。

2012 年 4 月土木学会に建設系 NPO を

ると政策提言活動や市民啓発活動、事業型活動が著しく少ない現況も明らかとなりました。

建設系 NPO 連絡協議会では今後立ち上げる中間支援組織の中で事業型活動を行うにあっての課題や問題点を探る目的で事業試行分科会が発足し私がその分化会長として取り組みました。その結果、今後取り組むべき多くの課題や問題点が得られました。

特筆すべき課題は、どの試行事業においても推進するに当たって大きな障害となったのは事業を進める上でのパートナー探しでした。建設系 NPO は社会基盤やインフラを取り上げたテーマが多く、これには行政との連携が不可欠でした。

現実にはどのテーマも試行事業期間の大半がこのパートナー探しに費やされたのでした。大きな要因としては建設系 NPO の社会的認知度が極めて低いと同時に事業担当 NPO の知名度がないことでした。

2 年間の建設系 NPO 連絡協議会の活動を経て 2014 年 3 月に「シビル NPO 連携プラットフォーム (CNCP)」なる我が国では初めての建設系 NPO を対象とした中間支援組織が創設され同年 8 月には法人格を取得し本格的な活動を開始しました。私も CNCP の事業化推進部門の担当常務理事

としてこれからも関わっていくことになりました。

また、土木学会創立100周年記念事業として我が国では初めての建設系NPOを取り上げた書籍が間もなく出版されます。私もその執筆者および編集者として関わってきました。

今後のシビルNPOの活動は団塊世代のシニアデビューの潮流の流れの中で確実に存在感が増すとともに新しい公共や共助社会づくりを担うべき期待されるサードセクターとしてその役割が顕在化していくことが書かれています。

シビルNPOを構成する人材の多くはプロフェッショナルのエンジニアとしてインフラ・まちづくりに従事してきた専門の技術や多くの経験を有した専門家であり、間違いなく今後シビルNPOが社会を変える大きな存在として位置づけられてくるでしょう。

新しい公共や共助社会づくりの取り組みは今後、全国至る所のインフラ・まちづくりの主流になって行くことは間違いないことと思います。

しかし、シビルNPOが補完からその主役の一人へとなって行くためには社会の制度や仕組みを変えていくことが必要で、それにはCNCPが個々の組織では難しかった政策提言や市民啓発を社会に発信しシビルNPOが行政・企業・大学と更なる連携が可能となる活動をして行かなければならぬと思います。

シビルNPOが補完からその主役の一人へとなって行くためにはまだまだ多くの困難が伴うことでしょう。

振り返るとNPOを立ち上げて10年の活動を経過する中で土木学会での活動や地域での活動等様々なNPO活動に関わる機会と巡り合え、更にその活動が今後ますます発展していく大きな可能性にあふれている環境の中でNPO活動にこれからも従事できることに大きなやりがいを感じています。今までCSNの活動を支えてくれた多くの支援者の皆様と私の家族に心から感謝すると共にその支援に報いる活動をこれからも継続して行きたいと思います。

□ 事業報告 □

CSN設立10周年を迎えて 記念セミナー開催される

2004年11月、シビルサポートネットワーク(CSN)は発足し、同時にNPO法人の認証をうけました。

2014年10月11日、設立10周年を迎えるにあたり、記念セミナーをオリンピック記念青少年総合研修センター311号会議室で開催いたしました。

セミナーは、山本卓郎前土木学会長をはじめ45名の方々がご参加ください、約2時間の講演を熱心にお聴きいただきました。

CSNでは、毎年1回、外部講師をお招きして公開講演会を催してきましたが、今回はこの10年間の活動をみなさまにご報告したいと考え、講師は会員がつとめることとしました。

また、セミナーの案内も、この間の活動を通じご交交流いただいた方、ご支援をたまわっ

た方を中心にさしあげています。

セミナーの冒頭、辻田代表理事から、みなさまのご支援とご協力に感謝するあいさつが述べられました。

講演内容は、以下の通りです。

CSNの活動説明および活動経験報告

- 「リタイア後の社会貢献としてのNPO活動」
高橋事務局長

CSN活動成果報告

- 「地域防災力向上に新しい取り組み」
辻田代表理事
- 「生ごみのエネルギー利用」
宇佐副代表理事

質疑応答では、みなさまからご質問ご意見をたくさんいただきました。取組みテーマについて、今後より強力に推進するうえでの、

示唆に富んだアドバイスなど、CSNをご支援くださっている方々のあたたかいお気持ちを、あらためて感じ入りました。

最後に、宇佐副代表の、つぎの10年にむけての力のこもった閉会の辞をもってセミナーの締めといたしま



辻田代表あいさつ

交流会もなごやかに



講演会終了後、17時すぎから「レストランとき」で交流会をもちました。

山本CNCP会長の来賓ごあいさつ（写真上）、舌間CSN理事の乾杯（写真下）に続いて懇談にはいりました。

神宮の深い縁と広々とした夕空を、レストランの大きな窓越しに見ながら、いつもの懇親会にはない名刺交換など、参加者が積極的に交流をはかってくださいました。

また、「よくぞ、10年もったね」とか「退屈でつまらないセミナーが多いが、これは話がおもしろく最後まで飽きずにきいた」など、うれしいお言葉もいただきました。

CSN事業について、協働して取り組みたいとのおはなしもあり、実り多い交流会とすることができました。



影の立役者 純米大吟醸

CSNサロンで講演してくださいました日本酒研究家高瀬斎氏差し入れの銘酒。そして、当日日本海をご持参くださいました亀山さん 会が大いに盛り上りました。

□ 設立10周年記念寄稿 □

設立10周年にあたって、会員から記念寄稿をいただきました。
内容は、記念周年にこだわらない自由テーマとなっています。

なお、高橋事務局長寄稿は、本号におけるCSNの10年間の活動報告も兼ねるため、記念セミナー講演原稿を一部書き改めたものを掲載しました。掲載は、氏名あいうえお順です



宇佐 洋二

NPO設立10周年を迎えて

早いものでNPO設立してから10周年を迎えました。

NPO設立総会は平成16年8月23日18時から中央大学理工学部土木教室にて24名（うち書面による出席4名）で行われ、議長に辻田さん、書記に私し、役員としては理事に宇佐洋二、内山平也、齊藤邦夫、辻田満、中内博司、永松太郎、

また、発足当初は場所を探しては打合せの会合を頻繁に開き、熱い思いで話し合った日を思い出されます。

千駄ヶ谷駅前の全郵政会館の地階1階の会議室で行われた推進委員会の席で最近耳にするキーワードの話しの中で、荻野さんか坂本さんか小田さんが「バイオマス」「新エネ」等の発言が切欠でその後の「バイオマス部会」へと繋がっていました。

ここで、初心に帰り当初の思いのなかで「できしたこと」、「できなかったこと」、「まだ途中段階であること」等を整理し、10年経た実績・経験をもとに、高齢化したメンバーでどのような活動をするべきかを再確認する必要があると思います。

「設立趣意書」では、本特定非営利活動法人シビルサポートネットワークは、シニアエンジニアの豊富な経験を生かし、市民参加と相互扶助の精神のもと、都市および生活環境、施設の維持更新および防災の関連分野を主体に市民や地域の視点に立って大学等研究機関及び企業間の技術と情報の交流を支援します。また、併せて市民や行政との協働事業を行うことにより一層の相互理解と地域の活性化を図ることを目的として活動致します。

監事として中根健一氏が選任され、代表者として辻田満、副代表として宇佐洋二が選任されました。

総会には多くの方が集まり、これから何が起こるのか？何ができるのか？

期待と不安の中での出発がありました。

《できしたこと》

大きくして、3本柱とした生活環境、維持更新、防災関連は取組が行われました。

大学等研究機関及び企業間の技術と情報の交流支援については、発足当初は武蔵工業大学（現東京都市大学）の星谷教授（設立発起人）との連携下コンサルを含め防災分野での共同研究が行われた。

市民や行政との協働事業としては、NPO所在地の吉川市において顕著な取組が辻田代表の努力で行われ、政策提言等も行い、現在に続いている。

《できなかったこと》

会員が集まれる場所（都内に貸室等）が無かつたことで、組織的な活動や意思の疎通に欠ける場合があったが、費用等の問題で実現できなかった。

《まだ途中段階であること》

企業間の技術と情報の交流については、CNCPによる「共創プラットホーム事業化研究会」（ゼネコン4社で発足し本NPOが推進担当）、が始まったところでありその成果が期待される。

《今後やるべきこと》

大学等の研究機関との連携についてはNPOの発足母体である中央大学卒業生を考えるとより、

強固な連携強化が必要となってくると思われる。連携の結果より多くのOBが加入することで高齢化・後継者難の一助となることも期待できる。

再びの東京オリンピックに想う

1 復興とオリンピック

東京に2020年のオリンピック開催都市が決定した瞬間、私の脳裏を過ぎたのは進路を決めた1964年東京オリンピックでした。

終戦の昭和20年に東京新宿に生まれ、廃墟となった街を戦後の復興未だの中で小学生時代を過ごし、中学生時代は、東京オリンピック関連工事を目の当たりにし、変貌を遂げ変わりゆく東京新宿の姿にふれ、以来、土木事業に強い関心を寄せた。

幸い地元新宿に都立唯一の土木科のある工業高校に進学を決めました。折しも「電源開発事業」、「名神高速道路建設事業」、「東海道新幹線建設事業」、「全国総合開発計画」等、社会資本整備の新たな時代を迎え、全国至るとところで建設ブームが起り、これら背景に高度成長期を迎えて

技術者を目指したもの企画、調査、計画、解析、設計、施工管理等の各分野で中堅技術者の働き場所は少なく、専門性を持った技術者への転換を迫られました、そんな中、一度は消滅した進学を次への契機とし、大学二部へ進学することを決断しました、入学したものの学園紛争吹き荒れる中、時代に流され翻弄されながら、昼勤務、夜勉学に明け暮れる日々を送っていました、そんな中、幸いにも上司と同期の教授にめぐり合いそして助けられました、当時の研究室への行き来が想い出されます、今は亡きお二人の恩人に感謝申し上げたい。

それから1964年の東京オリンピック開催年をスタートに定年までの42年間、建設コンサルタント業界一筋に、時代と共に多くの業務に携わり歩み終えましたが、再び東京に2020年のオリンピック開催の決定がもたらされ、私にとっては、進路を決めた1964年東京オリンピックを想い起こす特別な出来事でした。

3 技術者像

振り返れば、戦後の復興と東京オリンピック関連工事を原点に中堅技術者として歩み出し、専門

以上、簡単にまとめてみましたが、これからは高齢化が進みますので、担い手をどうするかを最優先で考えなければ存続はおぼつかないと考えます。

坂本聰



いました。将来、技術者を目指す者にとって幸先良いスタートであった。

2 技術者への道

高度成長期における、社会資本整備の新たな時代を迎える中、教育界と産業界から求められたのは、中堅技術者育成と現場を主体とした即戦力になる技術者育成であった。

そんな中、奇しくも東京オリンピック開催年1964年に工業高校を卒業し、進路として当時まだ産業として歴史が浅く認知度の低かった、建設コンサルタント業界を夢とロマンがあると教えられ就職を果たしたのであります。就職年の昭和39年4月建設大臣から「建設コンサルタント登録規定」が告示され、日本における建設コンサルタント業の幕開けとなった年でもありました。

技術の研鑽を積み重ねる中で総合技術者として成長を遂げることができました。

社会資本整備は、戦後の復興期から始まり高度成長期を経て、大きな変貌と転換を遂げた、建設行政を包括してきた法体系に環境関連の「環境基本法」、「環境影響評価法」、「環境政策大綱」等、環境を視点として、環境大国を歩んでいます、さらに、地球温暖化に対し地球次元へと領域の広がりをみせてきた。

今、建設産業は、環境創造産業として環境をデザインし、新たな価値を生み出す技術者像が求められています。

結び

高度成長期に多くの社会資本整備に関わり環境の重要性と価値に気付かされ、土木技術をとおし自然の大切さを教わり、そこに技術者像をみるとことができました。

自然との共生は永久の課題です。

今こそ Civil Support Network

舌間 久芳



創立 10 周年慶祝の極みです。

「よくぞ行動する NPO 法人として事業を継続し、活動範囲を広げてきたものだ。」これが私の実感です。ひとえに辻田代表をはじめとする皆々様の前向きな研鑽の賜物です。

さて、震災から 3 年半経過しても東北の復旧は遅々として進みません。国全体ではオリンピック関連をはじめとした大型の社会インフラ整備が目白押しですが、被災地では根幹のインフラ整備が混沌とし、明日への展望が開けないのが現状です。この時期に創立 10 周年を迎えたことは、天意としか思えません。今日ほど国家国民が災害に対する危機を叫んでいる時代はありません。故に我々 CSN は今何をなすべきかを真摯に考えるべきです。日本列島では災害が常態化しているにもかかわらず、国・自治体は金も無ければ人材も不足と嘆き、あるのは老朽化した公共物と手付かずの保全されていない山野です。

現状を根幹より解決できるのは、我々 CSN 以外にありません。ここにシステムを構築し、新規事

業を立ち上げ、10 周年記念事業とすることを提案します。それは「普請事業」であります。行基菩薩の利他行普請として知られるところ、古来より地方・地域のインフラ整備は住民参加で行われてきました。それは受益者負担の歴史でもあります。

足踏み状態の国・自治体に代わり、CSN が地域を熟知した住民とともに公共物の維持管理事業を行うのです。防災・減災はマニュアルどおりにはできないのが現実です。そこで、成熟した技術者が国・自治体とともに、森も木も知っている住民に参加を呼びかけて協働する。自分達で造り、自分達で維持管理する。これが防災・減災の原点になります。今後「普請事業」を続けるには、元気な高齢者を積極的に活用し、自らの手で自分達の生命財産を守る実践の場とし、公認の事業とする。

忘れてならないのは、我々 CSN は事業を遂行する NPO 法人であり、決して特別な技術者の集団であってはならない、ということです。

もっと市民のための公共工学を学び、国・自治体とともに地方創生事業に取り組むべきです。

土木の役割と後継者育成に想うこと

鈴木 進



CSN 創立 10 周年おめでとうございます。

先日、私の好きな作家である吉村昭著作の「闇を裂く道」(1987 年) を久々に再読いたしました。

ご存知の方も多いと思いますが、内容は東海道線「丹那トンネル(延長 7804m)」の工事について着手から完成までの記録を著者が克明に調査の上、作品にしたもので。

工事は、大正 7 年(1918 年)に始まり昭和 9 年(1934 年)に完成を見ましたが、当初 7 年の予定が、実に 16 年の歳月を費やし、多くの犠牲者(67 名)を出しました。これは、数か所の断層における落盤(山が抜けると表現するそうですが)と湧水との戦いの結果です。同時に芦ノ湖の 3 倍と言われる大量の地下水が抜けたことが原因でトンネル上部の広範な町村の渇水被害が甚大となり、農家は最終的には多くのわさび田や水田などの耕地を放棄せざるを得ない結果となりました。

工事期間中に、北伊豆地震・関東大震災などの災害が起こっていますが、掘削中のトンネルに大きな被害がなかったことは、トンネルは地震に強いということが改めて認識されました。

掘削開始にあたっての地質調査は、当初は地表からの推定のみで地上ボーリングも坑内の水平ボーリングもなく、まさに手探りの掘削でした。したがって断層の予測ができず、このことが落盤・湧水により多くの犠牲者を出した原因とされています。(ボーリング調査は工事の途中で実施された)

小説によれば丹那トンネルの掘削では、「水抜き工法」「セメント注入法」「圧気掘削工法」「シールド工法」など、多くの新工法が試行され、人身事故後に地質調査と湧水を抜くための「水平ボーリング」が国内で初めて実施されています。

土木は経験工学と言われますが、トンネルに限らず多くの先人が困難を乗り越えて貴重な経験により実用化された多くの技術の積み重ねの上に今日の技術があることを改めて知らされます。

土木を志す若人が年々減少しています。公共事業が税金無駄使いの象徴のように言われてきた昨今の情勢では当然のことでしょう。小説を通じて、機械設備も貧弱で技術経験も浅い時代に英知を傾けて懸命に工事を成し遂げた土木技術者の努力を想い、土木の役割を以下にまとめ、再認識してこれからの土木の後継者育成について考えてみました。

1) 土木技術は国民のために国家 100 年の夢を追う

丹那トンネルの開通により東海道線は御殿場周りの急勾配な山越え路線から海岸沿いの熱海経由となり、距離も約 12Km 短縮され、その後の運行時間の短縮に大いに貢献し、今日まで 80 年間その役割を担っています。

2) 国の国幹をなす土木事業は、政権交代・社会情勢などに左右されず続行されるべし

工事期間の 16 年間に起きた戦争・大地震・事変（二・二六事件）・政権交代等の社会変革の中でも関係者の努力によりトンネル工事は諒々と進められました。

つ公共施設は長大橋梁などのランドマーク的な施設を除き、道路・河川・下水・鉄道・港湾など日常的な施設について、機能して当たり前と考えられ、改めて意識されることはありませんでした。

昭和 30 年代から 50 年代にかけて、私たちが駆け抜けた時代は高速道路・東京オリンピック・新幹線・黒部ダムなどなどの、ビッグプロジェクトがあり、「黒部の太陽」の石原裕次郎に代表されるように、土木エンジニアは憧れの職業となっていました。

維持管理中心の時代になったとはいえ、土木事業が担う国土建設の役割と自然災害の多い日本の特殊性からも土木の重要性は今後も変わることはありません。

土木学会が創立 100 周年を迎ますが、大阪で開催される今年の全国大会のテーマは「百年の計、変わらぬ使命感と進化する土木」でした。

やりがいのある職業として、多くの優秀な若者が希望する職業に再び蘇るために、初等・中等教育の段階から土木事業の認識を高められるよう、国・学会が率先して社会科系カリキュラムの中に土木の話を取り入れる努力をし、啓蒙

3) 事業者は土木事業にかかわる地元関係者へは誠意ある対応に務めるべし

トンネル上部の丹那盆地の農家はトンネルに抜けた地下水のために農地を失い塗炭の苦しみを受け不穏な動きもありましたが、事業者は金銭補償・代替え措置などの救済を全力で行い危機を乗り切りました。

4) 土木技術者は普遍的な社会のニーズを理解し人命尊重と課題の克服に尽力すべし

トンネル工事は断層による落盤と大量の湧水、そして 67 名という多くの犠牲者を出しつつも新たな工法を模索しながら技術者は完成に努力しました。

治山・治水と自然相手の事業・人口の密集する都市での事業など土木事業は常に困難が付きまといますが技術者は社会のニーズを把握して、人命を尊重し、課題を乗り越える不断の努力が求められる。

多くの国民は、土木事業の内容を極めて狭義に理解しており、建築との事業の違いについても理解されていません。すなわち土木が受け持

することで後継者の育成を図ることが求められると思います。

わが CSN も機会をとらえて、教育機関に出前講義するなど、後継者の育成を試みるべきと考えます。

自己紹介

1945 年東京都築地生まれ。都立忍岡高校卒後、英文科を目指し一浪中に黒四ダムの記録映画を見て土木屋に憧れ、中央大学土木工学科に入学。

69 年卒業後、(株)協和コンサルタントに入社、全国の高速道路・下水道・造成設計、高速道路の施工管理、ジャカルタ市での都市内高速道路設計などに従事。

81 年に有志と「国際（86 年合併により高島と改称）テクノロジーセンター」を設立。

99 年代表取締役、現在に至る。

技術士（建設・総合技術監理）・測量士、弓道 3 段、趣味（沖釣り・日曜大工・ハイキング）

リタイア後の社会貢献としてのNPO活動

高橋 肇



10周年記念号によせて、わたしどもの活動舞台であるNPO法人シビルサポートネットワーク(CSN)の概略と、リタイア者のNPOでの活動をわたしの経験をふまえて書きたい。

設立の経緯

当NPOは、建設会社社員であった現代表の辻田が、リタイア後は土木技術を市民レベルに役立てる仕事をしたいという考えのもとに設立された。

そのため、当初のメンバーは辻田の出身大学である中央大学土木学科の同窓生や勤務していた株式会社間組の同僚が主体となった。

NPOの名称は、土木技術者を意味する Civil engineer と、市民をあらわす Civil を重ねて表したものである。CSNの存在命題であるミッションについては、宇佐副代表の記事をご参照いただきたい。

さて、CSNの特色は、事業型NPOであることだ。

NPOをよく知らない人にこのモデルを説明するにあたり、いわゆる慈善型NPOと対比させてその違いをご理解いただくようにしてきた。

しかし、いま事業型が必要とされる社会背景、またなにを期待されているかなどを知つていただくには、谷本寛治教授の唱える事業型NPOの機能についての定義がわかりやすい。

さらに、NPOならではの機能としてあげられた9項目は、つい専門性にとらわれ、ニーズに柔軟な対応が遅れがちになる技術者集団にとって、これからの方針性を示す重要な指針と考えられる。

復習と確認をかねて、谷本教授の定義をわたしなりに要約してみた。

□ 事業型NPOとは

(1) 定義

社会的財・サービスの提供、情報提供・政策提言を事業として専門的におこなうNPO。

事業型NPOの機能

過去10年間の活動の流れについては、第1図が事業別によくまとめられていてわかりやすい。

設立以降の主な事業



第1図

(2) 背景

政府・行政の担当領域（福祉、環境、健康、貧困、コミュニティ再開発、まちづくり等々）

- 価値の多様化、大きな政府の行き詰まり
- NPOが社会的事業を担う取組み

(3) 役割り

行政や民間企業とくらべ、柔軟に対応できる、独自の楽しみを提供する、狭く深い活動ができる、交流を深めることができる。

(4) NPOならではの機能

- ① 生活する人々の多様なニーズに応えることができる。
- ② 行政（公平性）にはできない個性的で多様かつきめ細かいサービスを提供できる。
- ③ 専門家や技術者が、生活者の視点に立って地域住民の要望や意見をまとめ、地域のシンクタンクとして機能できる。
- ④ 役所の縦割りの部署に惑わされることなく、ユニークな視点から取組むことが可能。
- ⑤ 企業・行政がまだ取り上げない新しい問題を先駆的に取りあげることができる。

- ⑥ 行政・企業ではできない隙間を担う。
- ⑦ 枠にとらわれずに自由な発想で活動できる。
- ⑧ 経済性重視ではなく、ニーズにあった質の高い活動ができる。
- ⑨ 行政が対応できない、ローカルでマイナー、逆に国境をこえたグローバルな課題に対応できる。

ここにあげられている9項目をみると、事業型NPOについての定義が、ボランティア云々というよりもずっと明確で理解しやすく本質を語っていて、しかも何をやつたらよいかという方向性まで見えてくると思う。

□ 事業型NPOとしてのCSNの考え方

CSNの考え方とは、第2図の通りである。

ソーシャル・ビジネスとは、社会的な課題解決にビジネスとして、あるいはビジネス的手法を取り組むことである。

したがって、せっかくお仕事のはなしをご紹介くださっても、このミッションに合わないため、お断りしたこともあった。

10年間の活動成果

つぎに、10年間の活動成果として、三つの事業の実績を報告したい。

① BCP普及事業

主として埼玉県下の中小企業延べ20社に、1社あたり10か月をかけて計画策定を支援した。

② バイオマスマウン構想の推進事業

10地方自治体の事業化にむけた計画策定の支援をおこなった。

③ 道路橋の長寿命化促進

技術系職員の不足に悩む市町村の支援をおこなっている。

NPOは、リタイア者の期待に応えてくれたか？

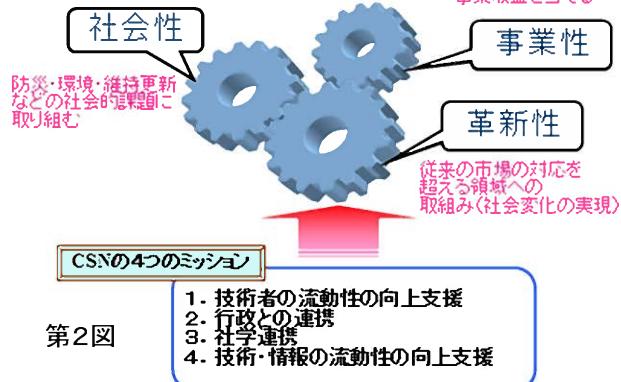
リタイアした多くのひとは、定年後の人生の生き方として、人間関係のなかに、自分を認めてくれるところ、居心地のいいところ、やりがいのあるところを求めるのではないかと思う。

その選択肢のひとつにNPOを舞台にした社会貢献活動がある。

ソーシャル・ビジネスとしての取組み

設立当初から事業型NPOとして活動

主たる活動資金は事業収益を当てる



5

CSNが新規の仕事を引受けるかどうかの判断は、CSN4つのミッションを基本に、具体的にはつきの3つの基準「社会性」「革新性」「事業性」に則っているかどうかによっている。

それは、果たして期待に応えるものだったどううか？

わが国のNPO活動の先駆けのひとり、堀田力さん。ロッキード担当検査として名をはせ、法務省官房長というエリートコースを捨てて、定年前にボランティアの道を選んだ方である。

その堀田さんが、ちょうど10年前、CSNが設立された2004年の文芸春秋7月号に「報酬は達成感一定年後社会貢献の心得」という意見を書いておられる。

そこで、堀田さんは心得として4つのポイントをあげている。

第二の人生の選択肢として、NPO活動が期待に応えるものであったか、それを判断する基準として、この4つのポイントをもって、自分の経験と対比させてふり返ってみたい。

ポイント① 社会貢献として、どんな活動を選ぶか。

堀田さんは、「何をしてよい自由が認められた貴重な最終段階の時期だから、自分が何をして生きていきたい人間なのか、突き詰めて考えろ」といっている。

でも、じっくり自分をみつめ、それを見つけるのはむずかしい。そんなとき、堀田さんは「子供のころの夢を思い起こせ、夢を追って方向を決めろ」と書いている。

わたしはどうだったか。リタイアしてつぎの人生は、今までと違った分野、自分で結果を実感できる仕事がしたいと一応は考えていた。ところが、友人に乞われて有料老人ホームの運営に携わることになった。

CSNも、辻田代表に乞われて参加したものだ。残念ながら、自分を見つめることもなく、なりゆきでNPOに入った。

でも、「人から乞われて」というのは、「他人様が、わたしのもつ何かを認めてくださった」ということであろう。

自分自身が何をしたいのかわからなくても、意外にもひとが見つめていて、やりたい道に導きいってくれたと考えている。

ポイント② 楽しくやるのに何が必要か。

堀田さんがあげている要素は、まず、生きがい・満足感・達成感である。そして、これが、ボランティアの報酬、とまで言い切っている。

そして、仕事では、自発性、積極性、創造性で

正直にいうと、わたしがNPO活動をつづけていられるのは、社会的貢献もさることながら、ストレスなしに仕事ができるからかもしれない。

ポイント④は、メリットは何か、である。

堀田さんは、社会的意義を第一にあげられ、つづいて9項目（詳細省略）を列挙されている。

わたしも、全項目ともまったく同感である。

しかし、第5項に「会話が魅力的になり、いろいろ友だちができる」とあり、気にかかる。ただ、友だちといえばいいのに、あえて“いろいろ”と付記したのはなぜか？

堀田さんは、ほかのところで、「人生に、ときめきとスパイスが必要」とか「友だち以上、恋人未満の人間関係は楽しい」といっている。すると、この“いろいろ”は意味深であり、わたしはここだけは、未達成ということになりそうだ。

これからの10年

□ 人材難に悩みそう・・・意外、団塊の世代は参入せず！

CSN設立の動機のひとつに、団塊の世代が一斉に定年をむかえるいわゆる2007年問題に対応することができた。

あり、自分の知恵をしぼって独創的に考え、自ら実行して成功した時に感じる充実感は素晴らしい、多くの企業人OBがこの魅力のとりこになる、と言っている。

わたしは、あまりクリエイティブな能力が無いらしく、もっぱら人と分かち合う共感に喜びを感じている。

ポイント③ 企業活動とどう違うか。

堀田さんは、一般的にいわれている相違点（目的、風土、合意形成、リーダーシップ、肩書、市民感覚、生活感覚）をあげている。

さて、わたしにとっての、一番大きな違いは、堀田さんのあげる違いと大きく違っていた。企業にいたときは、束縛（ノルマ、競争、上司、人間関係、コンプライアンス…）にさんざん苦しめられた。NPOでは、これから解放された自由感がなによりも楽しい。わたしにとって、企業活動との一番大きな違いは、この点にある。

ところが、意外にも、その世代からの参加者は少ない。というのがわたしたちの実感である。

団塊の世代のパワーを、リタイア後は社会貢献に活かしてもらいたいとステージを用意して、ここにおいでと旗まで振って待っていたが、使ってくれる人がいないのである。

団塊世代のパワーという風は、ステージに降りてこないで、頭上を吹き抜けている感がある。

予想が、大きくはずれたといつていかもしない。

堀田さんも、このことを心配して、「団塊の世代は常に競争にさらされた頑張り屋である。

その頑張り屋さんたちが、NPOの世界に入ってくる気配が見えない。

それは困る。社会は、団塊の世代シニアの馬力に期待している。力は儲からないが、生きがいに満ちた、楽しい世界に気づいてほしい！」といっている。

この発言は、我われNPO共通の願いである。

この10年間、CSNと共に活動してきた土木系NPOに共通する問題点は、メンバーの高齢化と、あとにつづく者が少ないとことであった。このままでは、人材難に悩むことになりそうである。

□ 明るい兆しも・・・

インターネットで検索してNPOを見つける人がふえてきている。

CSNでは、ここ数年の新規参加者がごく少ないなかで、数人の参加者があった。

その入会のきっかけが、自分のやりたいことをインターネットで検索して、わがNPOのホームページのミッションに共鳴してくださったということある。

このことは、今後のNPOの仲間づくりの指向性を暗示していると思う。

いままでは、メンバー集めは同窓・同僚・先輩後輩など、人脈とクチコミが頼りだった。

これからは、それに加えてホームページという世界に開かれた窓から仲間が入ってくることが期待されるのである。

□ ホームページは世界に開かれた窓

そのため、「何か社会貢献をしたい」と考えている人たちに役に立つ、ホームページの整備が必要である。

また、同時に、NPOに仕事を頼みたいと考

えているひとたちにも、ホームページは有効であることがわってきた。

地方自治体で実務を担っているのは、30代40代の職員である。かれらはパソコン世代であるから、技術問題をはじめ、なにかを知りたいときには、まずインターネットで検索するといわれている。

わがNPOを、こちらから一生懸命売り込もうとしても、効果はたかがしれている。いまは、逆に向こうが探している。その媒体になるホームページは、きわめて重要な存在であるといえるだろう。

魅力あるHPにするために、都度更新して新鮮さを保つ、検索者にヒットしやすいキーワードの工夫、絶え間ない情報発信等々がNPOに求められていると思う。

□ わたしの、これからの10年

社会貢献ができる仕事を、このNPOで、理念・価値観を共有する仲間とやっていける幸せを、あと10年もちつづけたいと願っている。

キャリアを考える

「キャリア」という言葉を聞かれて、どのようなイメージを連想されますでしょうか？

ひところ流行ったキャリアウーマンやキャリア官僚と言う言葉はあまり耳にしなくなりましたが、キャリアと問われると、仕事の経歴、仕事における肩書き・・・のように、先ずはなにか仕事に関係したことを連想される方が多いのではないかでしょうか。

となると、仕事をリタイアすれば、その人のキャリアは終わるということなのでしょうか？

唐突な質問から始まり、ご挨拶が遅れましたが、私は以前に所属しておりました総合建設業時代のご縁で、大先輩であられた辻田代表理事、高橋事務局長からお誘いを受け、今年度からCSNのメンバーに入れていただくことになりました新米会員でございます。

複数の職業を経て1999年から人材サービス業の一分野である再就職支援の会社でキャリアカウンセラーとしてスタートし、定年を迎えた現在はフリーランスでキャリア関連の講師、また企業でのキャリア相談に対応するカウンセラーなどを中

西島 葉子



心に活動しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、話題をもう一度「キャリアとは？」ということに戻しますと、私の自己紹介にもありますように、仕事の経歴をキャリアと捉えるのは言うまでもないことですが、敢えて言葉で表現すればそれは私のワークキャリアということになります。

この現在の私のワークキャリアは、ドラえもんのどこでもドアから突然ワープして出現したわけではなく、学業を終えて社会人としてスタートした頃に遡り、更には出生したときから、時間を経てキャリアを積み上げてきています。

皆様のキャリアも同じように考えてみていただきますと、お生まれになってから就学、卒業、そして社会人としての道を辿り、その後長く所属した組織を離れてからも、社会とかかわりながら新たなキャリアを構築しているとも言えます。

過去～現在～未来を見渡せば、人生そのものがキャリア、即ちライフキャリアの概念として捉えることになります。そのライフキャリアを通じて、人は生を受けて、周囲に育まれ成長し続けるもの

ではあります、では成長期とはいつまでなのでしょうか。いつまで成長し続けるのでしょうか。

人は生涯に亘って自分をとりまく社会の中で、より良く生きたい、生き生きとしていた、充足したいという思いがあつて今を生きています。

それが本来の人の姿です。であれば、人生が続く限り成長していくものとも言えます。もっともCSN会員の皆さんには、「そんなことはあたりまえだよ！」と一笑されてしまうかもしれません。

このようにキャリアを時間軸で捉えると「人生そのもの」ということですが、もう一つ、時間軸を立ち止まってみると、人は様々な役割を担っていることに気付きます。例えば次のように役割を「ライフロール」として分類した米国のキャリア理論家がいます。

- ・職業人：つまり働いて報酬を得る仕事に就いている
- ・学生：学校だけでなく社会人としての学習も
- ・息子・娘：親に対する子供の役割
- ・親：子供にとっての親の役割

おられるでしょう。

また、社会に出るまでは親から育てられるものとしての子供の役割でしたが、しばらく役割が少なくなっていたうちに、最近になって親を介護することで「子供の役割」が違う形で求められるようになることもあるでしょう。

1日が24時間である限り、それぞれの役割に費やす時間は必然的に限られてきて、となると時間やエネルギーの配分もその時、その時で変わってきます。

一つ言えることは、こうした役割があまりに少なすぎれば人生に退屈してしまいます。生き生きと日々を過ごすためには、多彩な役割をバランスよくこなしていくことが必要です。

みなさまの日々の生活で、ライフロールのバランスはいかがでしょうか。

ここでもう少しキャリアについて考えてみましょう。

実はキャリアとは「人が自分のキャリアをどのように捉えるか、どのように自分のキャリアに対して価値を見出すのか」ということです。それは人によって価値が異なり、自身のキャリアに自分なりの価値を感じることがその人の「内的キャリア」とも言われます。

- ・配偶者：配偶者、パートナーとして
- ・余暇を楽しむ人：（文字通り）余暇活動を楽しむ
- ・ホームメーカー：家事（家事全般、ゴミ出し、庭の手入れ、買い物、買い物のための運転等）
- ・市民：一般的市民活動（自治会役員、ボランティア、等）、選挙民としても、等

これらの役割は、あたかも虹が描く色彩のアーチのように例えてキャリアレインボーと名付けられています。その時その時によってそれぞれの役割に費やす時間、エネルギーは濃淡があるはずで、虹に例えられる役割を表現する色彩の帯の幅や輝きも、その役割ごとに濃淡となって表されます。

みなさまも振返ってみると、例えば40歳代、企業戦士として戦っていた頃はおそらく「職業人」としての役割に圧倒的に時間を注いでいたことを思い出す方もおられるのではないでしょうか。

そしてその頃から比べると、ホームメーカーとしての家事や余暇を楽しむこと、配偶者と向き合う時間がぐっと多くなっていることに気付く方も

例えば、釣りバカ日誌のあのハマちゃんが課長に昇進するとなったら、はたしてハマちゃんは嬉しいでしょうか、いかが思われますか。

おそらく多くの方が首を横に振られるでしょう。浜ちゃんは仕事はほどほどに、愉しく釣りをしながら、家庭を愛することに価値を感じているからです。

一方、かつての課長・島耕作は昇進の階段を登り、部長、取締役、社長、会長・・・と昇進と共に得られる仕事に満足する、このように人それぞれにキャリアに対する価値は異なるのです。

内的キャリアは、履歴書や職務経歴書に記されるような外から見える「外的キャリア」と異なり、主観的な価値観が働くのです。

我々の世代（敢えて一括りにしてしまいますが）は、後から右肩上がりで来た国家経済の高度成長から全盛時代を経てバブル崩壊を経験し、その後は益々の不確実の時代に生きています。

今や戦後の産業を支えてきた終身雇用や年功序列も崩壊の途を辿り、少子化、高齢化による極端な人口比率の偏り、非正規雇用を含む多様な雇用形態、労働力の多様性を求めるダイバーシティも女性活用だけでなく、高齢者、外国人、あるいは障がい者、さまざまな視点から考えていかなければなりません。

実はそれは我が国のことだけではなく、経済のグローバル化、ボーダレス化、次第に加速度を増す社会やテクノロジーの変化（それらは社会への恩恵も与えますが）、様々な形でダイナミックな影響を及ぼし、それが不確実性の時代とも言われるのです。

おりしも今朝（9月30日）の日経新聞朝刊に連載されている「私の履歴書」は前欧洲中央銀行総裁 ジャンクロード・トリシェの記事の最終日でしたが、そこにトリシェ氏による「若者たちへの伝言」として次の内容のメッセージが記されていました。

要約、引用してみると、世界の枠組みは先進国と発展途上国、市場経済と共産主義という単純な次元にとどまらないことを前提に、彼はこのように言っています。

第1は、驚くべき変化に備えよう。人生には全く予期しない転換が来る。特に地政学や科学、技術、社会構造などだ。

第2に、世界の格段に速い変化を予測することだ。情報技術や人工知能は急激に進化する。グローバル化で新興国の成長はさらに速まるだろう。世界の勢力図はそれゆえにもっと劇的に変わる。

第3に、3つの要素を磨いてほしい。逃れ

NPO 法人の存在意義

1. はじめに

NPO 法人の存在意義は何か。

私は、CSN (Civil Support Network) のメンバーになってから6年になる。最近ようやくその存在意義がわかりかけてきた。以下に、CSN の活動を通じて私なりに理解した NPO の存在意義について述べる。

2. 私の担当業務

CSNのホームページには、構成員は土木や都市・環境分野のシニア技術者の専門家集団であると紹介されている。活動は、土木の知識や経験を活かして、環境問題や防災問題、社会資本（以下、インフラという）の維持管理問題などの都市問題等に取り組んでいる。このうち私は、インフラの維持管理問題を担当している。

られないショックが起きた時の十分な復元力、さらに新たな仕事や社会の条件に対する柔軟性、さらに新しい変化を好機に変える創造性と素早さだ。

これらのメッセージは若者だけとどまらず、我々世代にも伝えられるメッセージと受け取りました。

つまり、このような時代だからこそ、キャリアは自分自身が価値を見出し、構築していくということであり、それが生涯続くものだということです。

キャリアとは誰のものでもなく、一人ひとり各自のものであり、そこにどのような意味を見出し、価値を認めていくのかも、そのひとりの価値観、考え方によるものなのです。

目の前にあるグラスの中のワインが「もうこれしかない」と思うか、「まだこんなにある」と思うか、どちらも絶対量は変わりません。

であれば、「まだこんなにある」と思って楽しみながら喉に送り、味わう方が、よほど美味しいお酒を楽しむことができるのではないかでしょうか。

それでは、会員皆様お一人おひとりのかけがえのないキャリアを祝し、そしてますますのキャリアの発展を願って「乾杯！」

和久 昭正



3. 活動テーマ

我が国の地方自治体の抱える問題の一つに、橋やトンネルといったインフラの維持管理問題がある。その主たる問題点は次の2点である。

(1) 土木技術者の不足

地方自治体は、技術者不足の対策として、業務をコンサルタントに外注して対処している。しかし、コンサルタントからあがってくる検討書や報告書を十分に理解することができない。その結果、適切な維持管理ができていない。

(2) 財政の逼迫

高度成長期（1950～75年）に建設された大量の橋やトンネルは、近いうちに建設後50年を迎える、老朽化が顕在化してくる。しかし、各自治体は、少子高齢化の進行に伴い社会保障費の負担が多くなり、十分な維持補修費の予算が確保できない状態にある。

4. 活動実績

上記2課題の解決策を検討した結果、PFI（Private Finance Initiative）の導入がベストであるという結論に達した。PFIの適用類型は、包括的民間委託などが考えられた。

この方針のもと、いくつかの地方自治体に働きかけを行った。しかし、PFIの導入に賛同した自治体は皆無であった。その実態を以下に述べる。

①市長室や政策室等の行政経営部門は、PFI導入に賛同の意向を示すところが多かった。

②逆に、現業部門は、反対の意向を示すところが多かった。

この現象は、次のように分析できる。

①行政経営部門は、財政の逼迫問題を実感しており、その対策を模索している。このため、その解決策であるPFIの導入を図りたいという意向がある。

②一方で、包括的民間委託は、自治体の職員を削減することにつながる。インフラの管理部門や施工管理を担当する現業部門は、人員削減の対象となる。したがって、自分が首切りまたは配置転換の対象になることを恐れ、反対している。すなわち現状維持を望んでいる。

サービスは民間企業に委託されている。市庁舎はレンタルである。その結果、例えば固定資産の税率は周辺同規模の市の半分で済んでいる、という報告がある²⁾。

日本でもこれを理想として政策に掲げて、過去に何人かが市長に立候補した。しかし、全て落選している。日本人は急激な変革を望まないのである。その対策を次に述べる。

(3)日本型「小さな自治体」の実現に向けて

我が国の風土にあったシティマネージャー制度を確立する必要がある。

例えば、PFI導入により生じる余剰人員は、昨今不足が指摘されている防災関係部署に回すなどの措置を講じる。すなわち急激に職員削減を実施しないよう配慮する。しかしこの分野も徐々に民間委託に変更していく、最終的には減らす。

また市庁舎や公民館等ハコモノは、オフィスビルの賃貸に切り替えていく。すなわちハコモノは減らす。

我々NPOは、このようなアイデアを自治体に進言し、実現に向けていく務めがある。

5. NPOの役割

(1)NPOの出番

上記のような問題点を指摘し、解決の方向に向かわせるのは、NPOしかできないことである。ここにNPOの出番がある。

なぜなら、コンサルタントやゼネコンといった民間企業は、地方自治体に対し、受注者と発注者という利害関係にあり、人員削減等に関する問題点の指摘を行うことは不可能である。また、同じ公務員という立場である国の官僚が地方自治体職員の人員削減を行うことは、難しい。

そこで登場するのが中立的立場にあるNPOということになる。すなわち、このような検討は、公務員でも企業人でもないNPOでなければ対処できない問題ということができる。

(2)目指すところ—小さな自治体¹⁾の実現—

目指すところは小さな自治体の実現である。例えば、小さな自治体を実現した都市として米国ジョージア州サンディ・スプリング市がある。本市では、シティマネージャー制をしいて、市の経営に当たっている。市の人口は10万人であるが、市長1人、議員7人、市職員7人（2010年3月現在）である。警察・消防を除く全ての行政サ

(4)土木学会のNPO支援体制

土木学会では、シビルNPO連携プラットフォーム（CNCP）を平成26年8月1日付で発足させた。その内容は、情報交流、政策提言、調査研究、事業化、人材開発および関連組織とのネットワーク化などの幅広い活動を通じてNPO法人の基盤強化を図るものである。すなわち、NPO活動に対する強力な後ろ立てが出来ることになる。

(5)土木学会全国大会での発表

以上の活動内容を論文にまとめて、平成25年度と26年度の土木学会全国大会で発表した。その結果、フロアから25年度は3件、26年度は5件の質問が出て活発な議論が繰り広げられた。このことからも上記の課題が、社会的に非常に大きな関心事であることがわかる。

6. まとめ

インフラの維持管理に関する人材と財政の問題は、我々NPOが関与しなければ解決出来ない問題である。

インフラの老朽化は、静かに、しかし確実に進行している。この問題を解決すべく何らかの対策を講じなければ、我が国の国民の安全は脅かされ、

経済活動に支障を来すことは確実である。我が国の存亡に係わる大きな問題といって過言ではない。その解決策の実施は、われわれNPOにしかできない、またやらなければならない重要な使命（ミッション）と認識し、解決に取り組んでいきたい。

[完]

[備考]

1) このキーワードは、もともと「小さな政府」である。したがって地方自治体を対象とする場合は「小さな地方政府」というべきである。しかし、本稿では地方政府を「自治体」または「地方自治体」と表記してきたため、ここでも「小さな自治体」という表記にした。

2) 参考文献：アメリカレポート・サンディ・スプリング市「小さな政府」の成功モデル
URL：<http://www.forum-nippon.com/conversation/sandy-springs>

自己紹介

大学卒業後、(株)フジタに31年間勤務した。前半の15年間は都市土木の施工管理、後半の16年間は技術研究所であった。

その後、中央復建コンサルタンツ(株)を経て、名古屋工業大学に勤務した。

大学を63歳で定年退官し、現在は(株)高島テクノロジーセンターにてアセットマネジメントを担当している。



賑やかなCSN創立10周年記念交流会風景(2014年10月)

第18回CSNサロンのご案内

日 時 平成27年1月12日(月) 15時～17時

会 場 国立オリンピック記念青少年総合センター
センター棟104会議室

(小田急線参宮橋下車徒歩5分)

演 題 「食品生産に貢献する
陸上養殖の未来・屋内エビ生産システム」

講 師 野原 節雄氏(アイ・エム・ティー専務取締役)

□ トピックス □



2014年3月土木学会創立100周年事業の一環として設立されましたシビルNPO連携プラットフォーム(CNPCP)がこの度東京都から特定非営利活動法人としての認定を受けて正式にNPO法人としてのスタートを切りました。8月1日に法務局に登記手続きをすませ、同日土木学会の講堂にて設立記念シンポジウムが開催されました。はじめにCNCPの山本代表理事から「CNCPのビジョンとミッション」について話題提供があり、その後早瀬昇氏(NPO法人日本NPOセンター代表理事)から「事業型NPO活動支援のための中間支援組織」、植田和男氏(NPO法人日本

PFI/PPP協会理事長)から「官民連携の最適解を探る」、そして辻田満氏(NPO法人シビルNPO連携プラットフォーム常務理事)から「シビルNPOの現状と課題」についてそれぞれ20分ほどのプレゼンティーションが行われました。その後、パネルディスカッションが行われ早瀬氏からはこれからスタートする中間支援組織としてなすべき重要なことは何かの説明があり、植田氏からは弱体NPOを強くするために最も重要なことは何かの説明がありました。それらの説明の中からとても参考となる幾つかのポイントを列挙します。

①シニアの活動としてのNPO活動でも常に現役の活動としての意識が重要である。②NPOとしてのマーケット作りは対象とする市場の問題点・課題がスタート地点である。③NPOとしても売りの商品(技術)が必要。④活動をサポートしてくれるサポーター、とくにメディアが重要である。⑤常にNPOとしての存在価値を保つことが必要。⑦顧客をマーケット化するエイジェント部隊が必要。⑧行政の総合計画に盛り込まれた内容を握りし、さらに年度計画に盛り込まれた予算措置が可能な事業のアプローチしない限り行政は

どんな良い企画でも予算措置は出来ないことを知らないといけない。その後、フロアーからも多数の有意義な意見が出され予定の2時間30分も時間を超過するほどの盛り上がりを見せました。その後、同会場で参加者らと懇談会が模様され盛会の内に設立シンポジウムが終了しました。当CSNからは舌間氏、宇佐氏、高橋氏、鈴木氏、和久氏、服部氏の6名が参加しました。



辻田氏 社会性・事業性がポイント

一切」と強調。さらに「団体・メンバーの関係性を置いていきながら、プラットフォームとなるCNCPの付加価値や信用力を高めることが重要だ」と語った。



辻田氏

NPOシビルサポートネットワークの代表で、CNCPの運営にも携わる辻田氏はシビルNPOの事業推進に当たって「(NPOの)認知度・信用度が極めて低く、事業型NPOを受け入れる社会システムも欠如している」ことが問題だとし、「外部とのコラボレーション(連携・協働)がキーワードになる」との見解を示した。

CNCPの役割については「パブリックな形でソーシャル・ビジネスを表現する場の拡大マシンピルNPOのソーシャル・ビジネスの先進的事例の顕在化」「産官どシビルNPOとのさらなる連携のあり方の研究」の4点を列挙。「社会性や事業性をポイントにシビルNPOとCNCPが何をしていくのか、広く議論していきたい」と述べた。

最後に山本氏は「今後ますます知恵を集めていかないといけない。若い人たちにも参加してもらい、CNCPの組織 자체を強くしていくことも大事だ」とイペントを締めくくった。

2014年8月18日日刊建設工業新聞より



本日は創立10周年、誠におめでとうございました。お集まりの皆さん異口同音にほめていらっしゃいました。ご労苦に対し、心から敬意を表します。今後の一層のご活躍を祈念いたします。(T.Y)

本日は、お招きいただきましてありがとうございました。記念セミナーの内容も素晴らしく、たくさん持ち帰ることができました。著名な皆様とつないでいただき、心から感謝申し上げます。夢を追っている皆さまは本当に輝いていらっしゃいますし、お若くて、楽しそうでした。幸せパワーをいただきました。(A.K)

内容の濃い3講演とおいしい料理そしてお酒楽しいひと時でした。(S.S)

今後もリーディング・シビルNPOであり続けていただきますよう。(T.K)

昨日は良き仲間にお会いでき、大変うれしく思っています。今後も長い付き合いの程お願いします。(T.S)

記念セミナー並びに交流会、盛況でよかったです。土木の世界も、これからはNPOが活躍する時代です。CSNはその先駆者ということになります。今後共、喜んでご協力をさせて頂きますので、どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。(A.W)

新たな出会いの場をご提供いただき大変感謝しております。(K.F)

定年後の方の価値ある働く仕事の場の提供。そこで今迄、培って来られ経験を存分に活かし社会に還元できる事。DCM/BCPは初めて伺う言葉・概念でしたがBCP：災害時の自社・自分達の継続性：自助及び広範に捉えるDCM：地域継続マネジメント：共助に加え公助の3つ即ち、企業・住民・行政が協働。個々の会社や個人だけでは解決できない、ライフライン、交通インフラ等の早期復旧の方法を検討、災害に強い地域作りにCSN/CNPC

様が重要な役割を果たされると理解しました。 (A.M)

* * * * * * * * * * * * * * * * *

技術系皆様の崇高な社会貢献活動のご発表に深く感銘いたし、未だにその余韻に浸っているところでございます。会社の経営も高い志をもってスタートし10年間、がむしゃらに頑張れば、信用とすべての経営基盤がおのずから確立されて、かならず初心の夢は成就するというのが私の持論です。これから日本の激動の時代に対し貴法人が既にさらなる次の10年を視野に据え先見性と実行力で、まるで、リニア新幹線のごとく、高速で夢を追い続けていこうとする皆様の熱い情熱に深甚なる敬意を表します。 (M.K)

* * * * * * * * * * * * * * * * *

土曜日はおめでとうございました。お疲れ様でした。今後益々のご発展が期待される印象を受けました。一層のご活躍を祈念しております。 (N.K)

* * * * * * * * * * * * * * * * *

10周年記念セミナーは盛会で、日頃のみなさまの組織運営のお力の大きさによるものと思いました。次の目標はオリンピック、さらなるCSNのご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。 (Y.N)

* * * * * * * * * * * * * * * * *

10年と言えば子供だと小学4年生?になるわけで、そう考えると結構な月日ですね。私も諸先輩方のお元気な姿や意気込みを感じ、刺激になりました。昨日の新聞にNPO法人に信用保証制度を適用する方針を政府が打ち出すと載っていましたが、よい弾みになりますね。今後もより一層のご活躍を祈念しております。 (H.Y)

* * * * * * * * * * * * * * * * *

編集後記

- ◇ 10周年記念セミナーと交流会が、無事終わってほっとしている。あらためて、ご参加いただいたみなさまと事務局スタッフに感謝申しあげます。
- ◇ セミナー終了後匂で、みなさまから続々とメッセージが届いた。どれも、あたたかいお言葉満載で、望外のうれしさを味わさせていただきました。ありがとうございました。
- ◇ 交流会は、文字通りいくつかの新しい交流が生じたようです。シニアになっても、どんどん輪が広がっていく。楽しいですね。会場では、純米吟醸酒を囲んで、わいわいがやがやはなしが弾んでいました。銘酒は、ひとを引きつけ、場を盛りあげる力をもつてることを目の当たりにしました。

(事務局 高橋 肇)

セミナーでは、これまでの取り組みや、地域防災力向上に向けた今後の取り組みなどを拝聴し、たいへん勉強になりました。一方、NPO活動における団塊世代を含めた人材確保、PR活動等につきましては、技術継承を含めて、私どもの会社にも共通する大事な課題であり、とても参考になりました。また、交流会の際には、土木の末端技術屋としては雲の上のようないい存在の皆様より美味しいお酒を戴きながらためになるお話をたくさん頂戴いたしました。楽しいひとときで、あっという間に時間が過ぎ去りました。次の20周年に向けた、更なるご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。 (S.I)

* * * * * * * * * * * * * * * * *

私はNPO法人の経営について無知ですが、社会から必要性を認められ、応援されなければ、10年間もの期間、存続できない点において、NPO法人も株式会社も同じだと考えます。消滅するNPO法人も多数あると伺った中で、シビルサポートネットワークさんが10年の節目を迎えたのは、多くの方から頼りにされ、また一緒に働く仲間を惹きつけていらっしゃった結果に外ならないと存じます。 (T.Y)

* * * * * * * * * * * * * * * * *

類似の記念セミナーにいくつも出席したことがあるが、いつも内容は退屈でつまらない思いをしていましたが、今回は話がおもしろく最後まで飽きずにできました。講演内容も、質的に充実していて、ここまでやっているのかと驚きました。失礼ながら、今までそこそこやっているなと思っていましたが、あらためてレベルの高さを見直しました。

(S.M)

(お寄せいただいたメッセージの内容により、一部省略したものがあります)